

ティーチング・ステートメント

所属 全学共通教育部

名前 小川直久

作成日 2024年2月26日

【責任】

私の専門は、理論物理学であるが、この15年ほどは文系科目（民族と宗教、歴史と文化、地域活動と社会貢献）を主に担当している。さらに来年度から民族と宗教、歴史と文化の授業が無くなり、代わりに「国際平和と民族」という私の授業が始まるので、この授業について記す。この科目を担当するにあたって、NGO, JICA, UNHCR などの関係者とつながり、私の講義の中では彼らにビデオ出演や参考資料を依頼している。私自身の行動も伴わないと、説得力のある講義にならないため、これまでと同様にアフリカの辺境地区の高校で出前授業を行ったり、太陽光発電の支援といった活動を引き続き行う予定である。講義の中で共鳴した学生に活動ができるように、UNHCR や JICA といった機関とつながり、「世界のために何かできること」を実感として学生の中に残したい。

【理念】

平和な社会の実現のためには、異なる宗教、異なる民族、異なる考え方を乗り越えて、お互いを尊重するという姿勢が最も重要であると考えている。これらは人間の本能ではないから、理性として、各人がそういうものを心の中で作っていかなければならない。そのために、民族、文化、歴史、地域活動といった事柄について十分な理解が必要である。自分とは異なるものを受け入れる、許容するということの難しさは、多くの紛争の例をみればわかるように簡単なことではないが、人類が共存するうえで、最も重要なテーマである。重要なことは多様性の尊重であり、それは、人の痛みがわかることであり、相手を理解する能力であり、対話する能力である。それらを学生が身に着けられるように教育を行うことが目的である。

【方針・方法】

この理念を達成するために、以下に述べる方針と方法で教育活動を行っている。

「他者の理解」

- 多様な民族の紹介と各々の文化、風習、考え方について紹介し、興味を持たせる。
- それぞれの民族が抱える問題について講義の中で解説する。

「理解の方法について工夫する」

- ビデオ、テレビ番組などの視聴覚教材を用いて、学生が興味を持ってそうな方法を駆使して授業に取り入れる。また、異文化理解として音楽を取り入れることなどが挙げられる。
- 実際に海外で働く JICA 職員、海外協力隊 OB、UNHCR 職員、NGO 職員たちの生の声を授業に取り入れる。

「教員自らが経験しておくこと」

- 教員自身が体験を積んでいないと、教科書を参照するだけでは、学生を納得させる講義にならない。これまで、中央アジア、ウズベキスタンにて大学での講義、青年海外協力隊の派遣先訪問、砂漠の民と会って友好を深め、西アフリカ・ガーナの辺境地区においては、高校生向けの出前授業、協力隊員の派遣先訪問を行い、現在は、東アフリカ・ウガンダでの NGO 活動に協力し、同国で最も貧しい地区の小学校に太陽光施設を作っている。これは今後、学生を巻き込んで発展させる予定である。

「学生に経験・体験させること」

- UNHCR 協会に協力する形で、学内の部活動：学生国際協力団体「フラート」（部活）に、国連難民映画祭を学内外に向けて企画・運営させた。しかしながら、フラートはコロナウィルスによる活動休止で現在、廃部になってしまった。再開を考えている。
- 学生にスタディーツアーへの参加を促しており、数年前にはウガンダで活躍する女性生活支援の NGO に、2人の学生が参加。今後も学生にこういった活動への参加を促したい。

「問題点を明らかにする能力を身につける」

- 社会における諸問題は、政治や行政とも絡み合い、どこの歯車が悪くて問題を生じさせているかを理解しないと一向に解決しない。問題を見つけ、解決する能力を身につける必要がある。コミュニケーション能力が何よりも必要である。

【評価・成果】

- 部活動フラートが存在したときは UNHCR 協会との協力で多くの国際映画祭を運営してきた。
- 過去 10 年間以上にわたって続けてきた講演会では、武装解除の瀬谷ルミ子氏や、元日本大使、フォトジャーナリストの安田菜津紀氏などを呼び、同時に彼らが学生と対話する機会を作った。

【目標】

《短期目標》

- 国際協力活動の部活動を再生させる。(2024 年度)
- 国際協力活動に関する講演会を持続させる。(2024 年度以降も)

《長期目標》

- 国際協力の体験をさせる。各種スタディーツアーへの参加や、近隣の NGO が主催するプロジェクトへの参加を求める。
- 将来において今の学生が、自身の専門性を生かす形で、海外協力隊員(JICA)や NGO 職員として海外で、社会貢献を行えるように支援し、その相談の窓口になる。